④学校と成績；

成績は中位。得意な科目は政経、日本史、古典。苦手な科目は数学、英語、物理。宿題は自分からする。友人関係はとてもいい。

⑤心配していること；

家事などはほとんど手伝ってくれないので、自立した後は一人でやっていけるかと心配していたが、今のところ自宅から勤務できそうなので、心配していない。

⑥親子関係：

とても気があっている、遠慮せず叱っている。頼りにして、種々相談に乗ってもらったりしている。養育返上を思ったことはない。

⑦相談相手：

里親会の仲間、自分の友だち、担任、家庭養護促進協会のケースワーカー。

⑧委託された事情：

出産後母親に引き取りのめどがなく、乳児院に預けられた。里親家庭での養育が望ましいとの判断から。

⑨実親との交流：

実親には１度も会っていない。縁組の手続きをしていた時にＡちゃんから２度、「私を生んでくれたお母さんに会いたい」と言う言葉が出たので「大人になったら、一緒に探してあげるね」と言ったら納得してくれた。　（以上）

203　看護教員（小児看護専門）の仕事をもちながら、3人の里子を育ててきた里母　　－娘時代は保育士志望だった

（1）概要：

働きながら里子を育ててきた里母は、2人目の里子Ａにきょうだいがほしいと、5歳下の3人目の里子Ａ3を預かった。0歳から特別養子にした１人目の元里子は、すでに大学生。

ポイント：子どもに関心と愛着のある里母は、仕事上でもプライベートでも、子どもにかかわることを選択してきた。

（2）家族構成：

5人家族。里母　５０代看護教員、里父も５０代で勤務者。祖母、元里子20才（０歳から特別養子、大学生で遠方に）、里子は11歳、6歳。実子なし。

娘時代は保育士を志望していた。

（3）里親になった動機：

もともと子どもが好きで、保育士になりたかった。看護教員の今も小児看護を専門としている。29歳で結婚。子どもに恵まれず、不妊治療も経験した。里父も１人子だったので、里親を志望した。

(4) Aちゃんについて：

11歳女子（小5）。3歳から8年間養育。親が育てられなくて。

今は20歳になった元里子にきょうだいがほしいと思って、9歳離れたAちゃんを預かった。実母は知的障害者。面会に行くと、他の子は珍しがって寄ってくるのだが、本人は里親になりそうな人には警戒した。

保育所に通わせ、小学校に入学してからは、3年生迄学童保育に行った。A2（姉）は柔道をやっていて、体格も良く強いので、Aちゃんには自慢の姉だが、怖がっていて、姉に気を使い、姉の言うことは聞く。

数字が苦手で、小1の夏休みに子どもセンターで検査してもらったら、IQが70－100と言われた。現在も算数は苦手で、宿題も1人ではできない。しかし、社交的で思いやりもあり、明るいので、友だちも多く、生活力はあると思っている。

①心身発達：

3歳で里家に来た時に、耳垢がぎっしりつまっていた。耳鼻科に行くと中耳炎で、風邪をひきやすかった。人見知りがひどく、言葉の遅れも心配されていた。里家に来てからは、とても明るく、おしゃべりな子になった。

②身体状況：

運動神経がわりと鈍いが、小1から柔道をしている。少し小さく、便秘がち、1年に1.2度夜尿がある。

③性格：

＜わりと＞わがまま、甘えたがる、劣等感が強い。気分にむらがあり、怒ると言葉が乱暴になる。都合が悪いと嘘をつく。1度すねると素直でない。遊び優先で宿題が後になり、親との約束をよく破り、（すぐ忘れてしまうのか）反省心がない。

④学校と成績：

成績は中の下。国語と音楽が得意で、苦手は算数、理科、社会。

勉強は＜とても＞嫌い、学校へ行くのは、担任が暗いので＜やや＞苦手。宿題はなかなかしないが、友だち関係は＜とても＞いい

⑤心配していること：

自立に備えて、高校進学、勉強ができないこと。だらしがなくて、身の回りの整整頓ができないこと。

⑥親子関係：

勉強面以外は、とても気があっている。思ったことは遠慮なく叱る。

⑦相談相手：

夫と姑。子どもセンターの職員や里親会の仲間とは話題にする程度。

養育返上を思ったことはない。

⑦実親との面会：

なし。小2の時、産んでくれたお母さんのことを聞かれたことがある。「大人になったら会えるかもしれない、今は子どもを育てられないから我が家にいる」と言ったら、それ以来口にしなくなった。

(5) 他の里子について（20歳女性A2と6歳男子A3の2人）

①A2は小学校からずっと柔道をやっていた。今は女子大の柔道部にいる。将来柔道を生かして、体育の先生を志望。

②当時1家は飼い犬まで含めて、全部女性だったので、里父が男の子も育てたい言い、さらにA3を預かった。A2と一時保護所に面会に行った時に、AもA3も癖髪をしていたので、我が家の子になる子だと気に入ったという。祖母は90歳という年齢なで、躊躇したが。

A3は親に虐待された子だったためか、外出や外泊後1時保護所に帰る時、抱きついて離れなかった。2月7日に面会して、3月には里家に来た。アトピーがあって、大変だったが、アレルギー検査をして1か月で改した。父親は建築業で、本人は2人きょうだいの上の子だった。再再婚してから、虐待が始まったという。虐待されていたためか、すぐ「僕なんてだめなんや」と言う。だめじゃないよと言っても、だめなんやと言う。妹は実母が育てている。

里母が仕事をもっていたので、送迎してくれる保育所を探し、無認可保育所が見かった。4月からの保育所通いは始め嫌がったが、今は楽しんで、1日も欠席なく通園している。A3も柔道を頑張っている。（以上）

104　里子に大学進学の機会を与えたいと里親を志向した研究職の里父
―里子たちの18歳以降の多様な進路

(1) 概要

今までに長期委託を4人、短期委託を3人、レスパイトの里子を6.7人預かった。

①第1子は2歳7カ月の男児で養子縁組し、私立高校から専門学校まで出し、現在は自立。

②（第1子が小3の時）小6の姉と小4の弟を受け入れ、2人とも公立高校から私立短大に。

③（第1子が高3の時）小1男子を受け入れ、私立高校から専門学校に進ませた。

④現在1人は、成人後障害のため障害関係の会の運営するグループホームに入居。また結婚した里子（姉）は子ども3人を設け、小学校の給食関係の職場に勤務。その弟は設計関係の会社に勤務、結婚し子ども1人。

その他、短期の里親として被虐待児の姉（5歳）弟（3歳）、中3女子等も受け入れた。

ポイント：里子の大学進学を支援したくて、里親登録をした里父だったが、里子たちの進路はそれぞれだった。

(2) 家族構成

里父70代、里母70代。実子はなく、里子1人を養子にしている。現在は夫婦2人家族。

(3) 里親登録の動機

初めて里親登録をしたのは、里父32歳、里母29歳の時で、2週間後に里子を委託された。

周囲に里親をしていた人はいなかったが、里親についての新聞記事を読んで、そのような子どもに大学進学の機会を与えられたらと登録した。今までに、里子２人を短大、２人を専門学校まで出した。４大希望の子もいたが国立大学の受験に失敗、私立４大は勉学意欲の上で不向きと考え、短大へ。

(4) 多くの里子を預かって：

現在４人のうち、１人は遠隔地に住み、３人は市内なので時々顔を出す。

大きい里子はすでに個性を持っているので、養育はかなり大変。小１で預かった偏食の里子の場合、我が家の食生活に適応するまでに３．４年かかったほどだった。

里親歴も長くなったが、今日の委託児童は障害問題も絡んで来て、１０年２０年前と比べると、里子養育の難しさが次第に増してきた感じを受ける。今後は「里親」としての自覚と共に、養育レベルのアップが課題ではなかろうか。

(5) 里親会の会長として

現役時代は短大の教員で、学長、副学長のキャリアで停年。現役時代から里親会の理事等を務め、平成１６年から会長職に就き、以後は組織と運営の見直しを図ってきた。

現在、里親たちの孤立を起こさないように、毎月の会報の発行、児相の里親専門相談員やメンターの訪問、就学前の里子の里親には毎月里親同士の「おしゃべり会」を、就学児の里親には「○○会」を隔月に開催している。児相と里親会が「車の両輪」のような関係になっていくことを念じて、日々の交流や年２回の公的な意見交換会を開いている。これは連絡会議と称し、児相側からは、所長、課長、係長、主査、担当職員、専門相談員が、また里親会側からは、会長、副会長、理事、その他の会員等が出席して開かれる。(以上)

103　里親をしていた友人に触発されて自分もと言い出した里父
―里子が大学進学を希望した時に備えて、１歳４カ月から学資保険をかけていた

(1) 概要：

実子（娘）が大学に入学した年の６月に里子を委託された。その子が大きくなって進学したいと希望した時に備えて、ずっと学資保険をかけていた。実子の時も、学資保険をかけていてとても助かったので。(当時は里子の通帳も作れず保険もかけられなかったのだが、保険会社の係員がそれを知らなくて、問題なく保険証を作ってもらった)

ポイント：１歳４カ月で初めて里子を預かった時から、実子同様に大学進学の備えのために、学資保険をかけ続けた里母

(2) 里親の家族構成：

４人家族。里母・里父共に60代で、里子２人。実子は35歳で自立。長期の里子をこれまで５人、他に、短期の里子や一時保護の子など９人を委託された。

Ａちゃんは現在４年制大学の１年生。１歳４か月から 17 年間養育。祖母が育てられなくて委託。なぜ母親が育てなかったかは不明。

夜寝かせるとき、泣いたりぐずることなく、一人で静かに寝ようとする姿勢が、１歳４か月とは思えなかった。生活全体に手がかからず、育てやすい子だった。養子縁組するかは、まだ分からない。大学が遠距離なのでアルバイトができない。

（3）里親登録の動機

友人が里親をしていて、里父が自分たちもと言い出し、児相に申し込んだ。見ず知らずの他人の子を、わが子同様に育てることができるかやってみようというのが、主人の気持だったようだ。Ａちゃんは待ちに待った委託だった。それ以後、周りも、とくに私たち夫婦の親や兄姉等、身内の人たちが実子同様に扱ってくれているのが、とても嬉しく、ありがたく思っている。

（4）事例：

＜育てやすい子だったＡちゃん＞

①学校状況：成績中の上、学校とても好き、宿題は言われなくともする、友だち関係はふつう。性格なども問題なし。

②姓について：

名前は実姓で呼んでいた。「なぜ（里）親と姓が違うの？」と聞かれても、夫婦で姓が違うようなものと言って聞かせていた。だから気にしていなかった。小学校３年生の頃に、里子であることを教えた。下の里子のことは、弟と言っている。

③親子関係と愛着：

わりと気があっている。何かあると、遠慮せずに注意したり叱っている。養育返上も思ったことがない。

④心配していること：

今の時世で、自立してキチンとした職に就けるのかが心配。

（5）13 歳男子の里子について：

①知的障害児で、生後２か月で委託された。当初音に対する反応が今いちだったので、耳が悪いのかと検査を受けたが、そうではなかった。

②学校と成績：

幼稚園・小学校低学年の頃は、人より発育が遅いぐらいに思っていた。３年生頃からだんだん差がついてきたので、児相、学校の先生、関係機関などに相談したり、検査を受けたりしながら、小学校は普通学級に在籍。中学から特別支援学級に入級。友人とのコミュニケー-ションはとれる。里母はクラスのお母さんとはやや年齢が離れているので、仲間には入れない感じだった。

③進路：

高校は高等養護学校へ進む予定。全寮制で、２０歳までは行政から費用が出る。陶芸が好きなので、その道へ進ませたいが、それで生活していけるようにはならないと思う。今から就職先を見聞するなどして、自立への道を探っている。

（6）その他の里子：

４年前に、6歳と５歳（１年生と幼稚園）のきようだい（ネグレクト）の里子が来たが、とても頭のいい子たちで、いろいろ話をしてくれた。現実離れした話や、妹との生活など。でも、2か月で祖母のもとに戻っていった。その後どんな生活をしているか気になっている。

（7）その他：

児相の里親担当が変わった時に、現在委託中の里子について何の知識も持たずに来る人がいるのは、いつも疑問に思う。（以上）

101　ルールの緩やかなファミリーホームを経営できる幸せ
－健やかな里子たちに恵まれて

（1）概要：

７年間養育里親をした後、フアミリ―ホームを経営することとなった。800 万円の補助金を得て、２階建ての家を 1.000 万で購入、寄宿舎に用途変更。耐火設備を設置して、1.150 万でリフォームし転居した。茶の間以外に９部屋ある。２階は男子組、１階は女子組にしている。

ファミリーホームは、措置児童（里親家庭でいう里子）１人に事務費（里親でいう里親手当）が約 15 万、６人で約９０万円。事業費（里親でいう一般生活費等）が１人約５万円。３人以上の養育者(養育補助者含む)で養育を行う制度である。（一般的には夫婦２人のほかに１名以上の雇用が発生する。）措置児童が４人を切ると経営は難しくなる。里父（養育者）は里子４人の時は会社員だったが、それ以上になると兼業はできず退職した。個人事業主になるので税務申告が必要。

でも里親（養育者）になって、とてもよかった。人生をやり直すことができたら、また里親をやりたいと思う。今までに、長期委託を７人、短期委託を４人受け入れた。専門里親の研修は受け終了したが、資格の申請はしなかった。

ポイント：脱サラでファミリーホームを経営している里父は、ルールの少ない家族的な雰囲気のファミリーホームを経営している。

（2）里親登録の動機：

里父４０歳の時に里親登録をした。実子は帝王切開で出生した３人。児童虐待のニュースを見聞きするたびに心が痛み、そうした境遇にある子に安心して暮らせる場所を提供しようと考えた。

しかし今になると、里親になる時は、実子の気持ちを聞くことも大事だったと思う。「里親」は親の仕事で、子どもにして見れば、自分たちがソンしていると言う感情もあったと思い、反省もしている。

(3) ファミリーホームの運営

うちは、子どもたちの間がうまくいっていて、３人姉妹はよく勉強するので、他の子も引っ張られている。しかし、以前養育の難しい小学生の男子が１人来た時は大変だった。やたらにキレるし、暴言を吐くので、下の子は怯えていた。

余談になるが、「問題のある子は、直そうとしないで、その間を無事に預かる」位の気持ちの方がいいと、ある人から助言された。被虐待児は専門里親が委託されるべきであろう。

ファミリーホームの中には、子どもの構成などから、シビアな養育が必要で、あえてルールを厳しくしているホームもあると聞いている。個室にはカギをかけるよう指導したり、お金の使い方も管理し、施設にいるかのようにしている場合もあるが、そうせざるを得ない事情があると認識している。個人的にはファミリーホームの特色（里親家庭が大きくなったもの）が無くなってしまわないような養育を目指していきたいと思っている。うちのホームには、たまたま問題の少ない子が来ているので、緩い（甘い）養育にしていられる。1 人でも問題をもつ子が入ってきたら、そうはいかなくなると思う。

家事分担の表は子どもが作っているが、やる子もやらない子もいる。うちは甘やかしているほうで、お菓子もアイスクリームも、いつも食べられるように置いているが、子どもたちは意外に食べない。とりわけ女の子はダイエットだと言って。

(4) その他：

昨年、養育技術の向上のため専門里親研修を受けたが、専門里親を希望するかどうかは別として、全ての里親がこうした研修を受講できたらいいと思できる　　（以上）

2）福祉的関心がある人々の作る環境（2 事例）

多くの人の中には、なぜか、どんなきっかけからか、福祉的な関心を抱いている人々がいる。

事例 105 は、娘時代からタイの子どもに学資援助をするプロジェクトにかかわり、タイに何度か渡航した経験もあり、親戚からは「変わり種」といわれていたそうである。その福祉的精神の形成には、掘り下げれば、何かのきっかけもがあったのかもしれないが、定かでなない。

事例 106 は、里親になることに、もっとはっきりしたきっかけがあった事例で、里父の実母が、養子だったことで、里父がそうした子どもを援助したいと言い出した。親たちの福祉的関心はいつの間にか家族全体に広がり、実子はいま大学院で福祉を専攻しているという。

欧米の養子や里子をする人々文化は、多分に宗教的な背景があって、慈善が社会的風土になっている社会も見られるが、こうした風土（歴史も含めて）が乏しい日本では、里親が特別の行為であるかに見られてしまう。わが国の場合、現在里親制度を支えるのは個人的動機である。

105　娘時代から福祉に関心があり、タイの子どもに学費援助をしていた里母
－実子が自立して、夫婦二人になって里親登録

（1）概要：

タイの子ども学費援助基金を 10 年サポートしていた里親が、里親登録をして、小 4（A）と小 1 の姉妹を預かった。実母は精神障害（統合失調症）で入院し、退院後も、里子たちと交流はあるが「子どもの世話は無理」と言って引き取る意思がない。Aは、ＡＤＨＤで、以前の学校でも忘れものが多く、盗みもあり、成績も悪かった。妹もその傾向がある。

ポイント：独身時代から、なぜか福祉的動機の強かった里母が、実子の自立後に里親を志向して、はからずも多様な里子経験をすることになった。

（2）家族構成：

5 人家族。里母は 50 代で専業主婦、里父は 60 代で勤務者。自立した実子は 30 代で看護師。里子は 14 歳（中 2）のＡ、12 歳（小 6）の妹、6 歳（1 年生）の男の子の 3 人。その他に、昨年 3 月から今年 7 月迄、高校生を 1 年 4 か月間養育した。

（3）里親登録の動機：

姉が死亡したこともきっかけだったか、独身時代からダルニー基金（タイの子どもに年額 1 万円の寄付をすると、1 万円で 1 人が中学校へ行けるとのこと）への寄付を 8 年ほど継続。タイにも 5.6 回行って、村人と交流をした経験もある。親戚の中でも、（福祉的関心をもつ点で）変わり種と言われている。平成 8 年から弁護士会の市民モニターになり、それ以来種々学ぶ機会を得ている。

平成 16 年、実子たちも自立し、広い家に夫婦 2 人だけになる。この広い家を有効利用するにはと思案した。ＤＶ被害者のシェルターにすることも考えた。平成 18 年に里子を迎えれば、社会的養護の一端を担えるかと、市の里親促進フォーラムに参加して種々話を聞き、里親登録をした。年齢・性別などの点で里子を選ばない旨を書類に書いたら、すぐ里子を委託された。

（4）事例：9 歳からＡちゃん（14 歳、中 2）と妹（小 6）を、5 年間養育している。

①委託前後の状況：

姉妹の実母は（恐らく統合失調症で）入院。実父は定職は持っていたが、パチンコ好きで、育児に協力しなかった。母親の入院後に、姉妹は 3 か月間一時保護所に預けられていた。Ａちゃんは、預った当時４年生で，ＩＱはボーダーライン、ＡＤＨＤと聞かされた。学力も低かった。

実母によると、幼い時から多動で、実母は一度も抱くことがなく、言葉も遅くて、3 歳になってやっと話すことができたという。母親はあちこち病院に行き、診察を受けて服薬もさせていた。小学校に入学時に、特別支援学級への入級を助言されたが、実母は普通学級を志望し、放課後に毎日先生が自宅に教えにきていたという。

Ａちゃんの口癖は「頭がよくなりたい」で、里母は、まずは毎日、足し算の特訓をした。

引き算、割り算と里母が作った問題をやらせた。Aちゃんは初め、5 分と座っていられなかったが、ご褒美を用意しながら毎日特訓を続けているうちに、成績が少しづつよくなってきて自信もついてきた。

②性格：

預って初めに感じたのは、明日という日が無いように見えたこと。積み重ねが利かない。座席にジュースをこぼしても言わない。謝らない。嘘をつく。人の言葉のあげ足をとる。反抗する。理屈を言う。だらしがない。頑固でこだわりがあるなど。

性格的に「こだわりが強く、強情、よく嘘をつく、約束を破る、反省心がない」が、一番困っていたのは、お金や物を盗むことだった。目に見えることはすぐ口に出し、失礼な鋭いことば（豚みたい，短足など）を言うので、注意している。

昨年、妹が里母のお財布からお金を抜き取り、近くのコンビニでお菓子を買ったり、友達にプレゼントを買ったりしたのを、Aちゃんも真似して、里母が入浴中にバッグのお財布から 1 万円を抜いて、友人へのプレゼント、参考書、自分の好きなぬいぐるみなどを買った。「そんなことをするなら、刑務所に行くか、坊主になるか、交番に連れて行くか、貯めていたお年玉を全額ドイツ村に寄付するよ。それとも（ロングヘアにしていた）髪を切るか、どうする？」と言うと、泣きながら髪を切らせた。学校へも行きたくないと言ったが無理に行かせた。いつものように里父が学校へ送り届けた。ところが友人から「可愛い」と言われたそうで、気をよくして帰って来た。その後に美容院で整えてもらった。今は盗癖はおさまった。

③学校と成績：

学校へ行くのはとても好きで、現在は友だち関係もわりといいが、5 年生の時には、いじめにあった。また中学 1，2 年では、口で言わないで人を押して突き飛ばす結果になったり、友人に教科書をカッターで切られたりしたこともあった。

家で勉強させているので、漢字などはよく覚えて、他の子より早い。成績は中の上、宿題も言われるとする。国語と算数は得意だが、理科は苦手。今は塾にも行っている。

④心配していること：

我が家に来るまでは度々の万引きがあったとか。来てからは、学校の落とし物をもってきてしまうなどがあり、物やお金を盗むので困っていた。現在の心配は、「言うことを聞かない、片付けが苦手、自分のことをタナに上げて、人のことを言う」など。

小学校 4，5 年生の時には、学校の落とし物の中から、気に行ったものをもってきて使っていたり、友人宅から衝動的にサインペンを 5，6 本持ってきたりして、交番に行ったこともあった。里母のお財布からお金を盗ったことも、何度もあった。心に訴えるように叱ったり、お金を盗られないように工夫をするなど、色々働きかけてきた。ある時、髪を切って懇々と諭したら、その後はしなくなった。

⑤実父母との関係：

預かった後で実父母は離婚したが、姉妹と両親との交流はあり、実家に 1 週間泊まらせたり、家族旅行などもした。実母はすでに退院し生活保護を受けて、けっこう（独身暮らしを）楽しんでいるようだ。今、実父は祖母のマンションにいる。Aは父親を慕い、妹は母親を慕っている。

小さい時から、悪いことばかりするので、実母に叱られ叩かれたりしていたためか、両親

の離婚を聞いても、自分には関係がないというふうに、けろっとしていた。妹のほうはショックを受けて、お風呂で泣いていた。その後１年位、妹は学校から帰ってくるなり、言いがかりをつけて反抗ばかりして、心が荒れていた。

しかし、離婚した両親が２人で誕生日に来てくれたり、実母は連絡すると、運動会や吹奏楽のコンクールなどにも、離婚前同様に必ず来てくれた。その姿をみてか、少しずつ立ちなおっていった。しかし実母は「子どもの世話は自分には無理。里親さんに任せれば安心」と、生活保護を受けながら、治療に専念している。

２人の名は、本来の弘田姓（仮名）を使っていた。（里子のほうが）里子であることを知られたくないので、学校でも（里親が）弘田姓を使っていたが、Ａは中学へ入学してから、親と子で姓の違う友人もいると知って、「いいよ」というので、里親の名は実名に戻した。Ａは今は塾へ熱心に通っており、社会と音楽は5.他も４をとったりする。大学へ行きたいと言っている。

⑥親子関係：

里母は、姉妹とわりと気が合っており、遠慮せずに叱っている。最初は里子の行動が把握できず回り道が多かった。（通常の思考回路と違うこだったので）

実親のことは「お父さん、お母さん」と普通に呼ぶが、里父は、はじめから「お父さん」だったが、里母は「山田さん（仮名）」、また、春子さん（仮名）、アンナさんなどと、名前を変えて呼んでいた。現在もＡは春子さん、妹はアンナさんと呼んでいる。しかし、友人の前では、「お母さん」と呼び、妹は自分を呼び捨てにしてくれと言っている。

（5）養育返上を思ったこと

最初の半年は、このように宇宙人のような子どもたちに出会ったことがなかったので、精神的に参ってしまい、何度か養育返上を考えたが、ここを出たらこの子たちはどうなるのかと考えたり、他の里親のところにやれば、きっとその里親も苦労するだろうと夫と励まし合い、もう少し頑張ろうとして乗り切ってきた。子どもたちも、学習面で自信をつけるなど、成長している。

里母のお財布からお金を盗ることもなくなり、思春期に入り、考え方もしっかりしてきた。里親としても、子どものパワーをもらって、貴重な時間を過ごしている。

（6）その他の里子

○Ａの妹（小学校４年生）

妹（現在６年生）は、姉（Ａ）がＡＤＨＤで手がかかるため、姉の陰に隠れていたような子だった。預かった当時１年生で、おしっこのしつけができていなくて、まだオムツがとれなかった。１年生の３学期には、帰って来てコートをめくると、大量のウンチがパンツの中にあった。トイレに行くのが面倒くさいのだという。衝動的で思いつくまま行動しようとする子だった、

Ａと一緒に寝て３日でおしめをとり、夜トイレに行かせたり、４時以降は水分をとらせなかったりと、あれこれ模索した。昼間にも少しおもらしがあった。カレンダーにチェックしたり、学校ではトイレに行くよう教えた。４年生ごろやっと治った。妹の方がむしろ、冒険的、衝動的で、思いつくままに行動しようとする。その傾向は今も続いている。

○小１の男の子

今年８月、実祖父の体力と経済面から養育ができず、４月から７月まで別な里親家庭で養育されていた男の子を預かっている。母親には精神疾患があり、祖父とふたりで暮らしていたが、祖父が養育できずに前里親に預けられたが、不調で、養育を解除された。預った後は、トラブルを避けるために、祖父との連絡は児相を通して、児相担当者と共に会うことにした。

○短期の里子（1年4カ月養育の高校生）

5歳から中学3年まで施設にいた子で、小3～中3迄は不登校だったという。昨年4月から今年7月夏休み、18歳の誕生日の措置解除まで預かって、養育した。

単位制の○○高校では、1年生では7単位しか取れなかった。その1年間実母と共に暮らしたが、喧嘩が絶えず、家出を何度もし、友人宅を転々とした。これではだめだと自ら進んで児相に出向き、我が家に来ることになった。

1年間4か月預かり、２年生次には31単位取った。３年次の１学期も欠席０で頑張った。

この子は里親宅で、アルバイトをしながら（平日は学校終了後5時ごろから10時まで、土・日には、8時ごろから10時まで）７０万近くを貯めた。ひとつのことをこんなに長くしたことはなかったそうで、本人の自信につながった。今は実母と暮らしているが、11月初旬、先生から早くも就職の内定が決まったと連絡が入った。　（以上）

106　養子だった母親をもつ里父が希望して里親登録
－いま実子は大学院で福祉を学ぶ

（1）概要：

里親登録23年で、専門里親を２回更新した。登録前から実子が１人いる。里父の実母が幼い頃（戦前）養子に出された人だったので、里父から積極的に里親登録を志望した。これまで（1週間の短期の里子も含めると）合計15人の里子を預かった。現在は、知的障害を持つ里子（男子）を１人養育している。

ポイント：里父は、生母の境遇に動機づけられて里親を志向した。多くの里子を養育する福祉的風土を持つ家族で、実子も今、大学院で福祉を学ぶ。

（2）家族構成：

3人家族。里母、里父共に50代。里子（男子）のＡちゃんは中１で、実子（24歳女子）は大学院で福祉を学ぶ。里親登録してすぐに最初の里子（1歳9か月）を委託された。実子と同い年だったので、外向けには双子と説明して育てた。A2は、1年浪人して大学に入学、現在は卒業して、24歳で自立。時々遊びに来ては食料品などねだって持ち帰る。

（3）里親登録の動機

里父の実母は養子に出された人だった。夫が「家庭に恵まれない子を育ててやりたい」と里親登録を希望した。里父は好奇心が強く、色々やってみるのが好きな人。事はほとんど手

伝わないが、子どもを遊ばせてくれたりする。

（4）Ａちゃんについて：

現在養育中のＡちゃんは13歳男子（中1）で、軽い知的障害をもち、特別支援学級に在籍。実母も知的障害者で施設育ち、子どもを育てる能力がなかったので、Ａちゃんは2歳8カ月で乳児院から里家に委託され、１１年間が経過。実父は認知もしないまま死亡。

健康問題より性格的に問題があり、毎日些細な嘘をつき、強情で、よく意地悪をする。反省の意味がわからないので、叱ってもまた同じことをする。以前家の中ではお金、スーパーではおもちゃなどを盗むことがあったが、厳しく叱って、今は落ち着いている。誰かに挑発されるとパニックを起こす。

①学校と成績：

はじめ普通学級に通っていたが、小6から特別支援クラスに移籍。勉強は嫌いで、家でも学校でもしない。支援学級に移ってからは、クラス以外には友だちがいなくなった。

今後の進路としては、高等養護学校へやるつもり。寄宿制で、月曜から金曜迄ステイして週末に帰宅する形の高等養護学校があるが、家から通える別の高校に入れたほうがいいかと思案中。

②今の心配：

嘘をつくこと。学校でも家でも、少し面倒なことは嘘をついて誤魔化し、その場しのぎをしようとする。

③親子関係：

比較的気があっていて、遠慮せず叱っている。

養育返上を思ったことはない。

④実母との交流：

定期的に面会。実母を「お母さん」、里母は「ママ」と呼ばせているが、実母とのことは、その時だけですぐ忘れている様子。

（5）その他の里子：

○Ａ2

非虐待児で、母親も本人も低ＩＱ。2歳から4歳まで養育。本人は実母と祖母から虐待を受け、大腿骨骨折の跡があり、頭も傷だらけ、煙草の火の跡もあった。

○Ａ3

高校１年から３年迄養育した子（男子）がいたが、施設で問題を起こした子で、里親宅でも種々問題を起こして措置変更。今は少年院にいるのかもしれない。

施設から来た子だったので、初め「家庭」とか「親」の意味が分からなかった。里父里母のことも、1か月位は施設職員と同じ「先生」だと思っていた。玄関や廊下の電気を消して節約することも知らなかった。施設にいた時に、実父は１.２回面会に来たことがあったようだが、お互いに嫌っていた感じだったという。実父は性格的に問題があり、Ａ3は、他の親族からあまりかかわるなと言われていたとのこと。実母は１度も面会に来ていない。両親の

顔は覚えていない。

小１の時、乱暴をして親戚宅にいられなくなり、児相に引き取られた。施設や里親がどんな場所かわからない中で、児相の職員に「施設に行きたいか、里親に行きたいか。施設でいいね」と聞かれ、施設を選んだようだが、本人が言うには、「どういうところか前もって両方見せてもらっていれば、絶対に里親の方を選んでいたと思う」（以上）

3）異文化に触れた人々のおおらかさ（２事例）

里親制度は、（宗教も含めて）それぞれの社会のもつ文化に支えられている。どのような「制度」が敷かれていても、里子養育を選択するのは里親側である。日本にはイエ制度の名残が人々の意識の中にあり、人と人とのつながりに際して、血縁にこだわる文化がある。家族と他人、ウチとソトの使い分けがされる。とりわけ家族の個人化が進んできた現代では、自分の家族の中に血縁のない他人の子どもを加えることは、ふつうでない出来事であり、里子を養育している人びとは、しばしば特別視されることもある。

しかし、欧米では宗教的背景もあって、社会貢献のためにも子どもを養育する文化がある。白人の家庭が、皮膚の色の違う子どもを養育することは珍しくない。皮膚の色、目や髪の色が違う子どもたちがぞろぞろ、といういう光景は、欧米の家庭を訪問した人には珍しくない家族の風景である。

ここに収録した２事例は、子ども時代いずれも欧米にある期間住んでいた里母の事例である。この人々は、欧米での体験から里子養育に対して違和感を抱かない。通常は子どもに恵まれず、子どもを産みたいと不妊治療に時間を費やす例も見受けられるが、とりわけ

事例 309 は、「29 才になって、子どもに恵まれなかったので、不妊治療に時間を取られるより、里子を育てる方法を選択した」とおおらかに言い切っている。「フランスで、ベトナム支援の一環として、国際養子縁組を進めていて」と言う表現も出てくる。

事例 304 は、同様にアメリカに関心と滞在経験を持つ里親である。事例 309 同様に、力みなく里親であることを選択したかのような里母である。

日本が国際化によって文化的変革を遂げてゆくにつれて、懸案の里親委託率の上昇は、こうした感覚の人々が増加して、おのずから実現するのではなかろうか。

304　若い時にアメリカ滞在経験もあって、里子制度に文化的な偏見のなかった里親―種々あったが、今は里子のエリートと言われている子

（1）概要

20 歳の里子は、一旦委託解除されて２年間のブランクの後、現在高３で、この３月無事に卒業する。

ポイント：里親文化のあるアメリカに関心と滞在経験をもつ里母は、力みなく里親であるこ

とを選択したようである。

(2) 家族構成：

4人家族。６０代里母（専業主婦)、自営の里父、里子はＡ（20歳）とＡ2（12歳）の２人。実子は31歳（自立)。

Ａちゃんは高校生（20歳）で、委託されたのは2歳半から通算16年間。一旦委託解除されて、2年間のブランクがあったが、来年3月には高校を卒業して、知的障害者の職業訓練所である「能力開発センター」で、寮生活をしながら2年間の職業訓練を受ける予定。それが続くかは心配している。Ａ2は6年生（12歳）でネグレクトがあって、5年生の夏から養育、現在地元のサッカーチームのメンバーである。

(3) 里親を志望した動機：

娘時代に、欧米にいる親戚の許に遊びに行ったこともあり、外国の養子（里子）についての記事等を見て、かねがね里子制度に関心を持っていたので、里子の受け入れに違和感がなかった。今は31歳になった娘が子どもの頃、弟か妹をほしがった。初めての面会で、Ａちゃんはとてもかわいかった。里父と娘が一緒に住むことを希望した。育てるのに大変なことはなく、おとなしい子だったので、育てやすかった。しかし思春期になってから、多くの問題行動が出てきた。

(4) Ａちゃんについて：

男子高校生（20歳)、2歳半から通算18年間養育（途中2年間措置解除)。実母は1歳のとき3歳の姉とＡをベービーホテルへ預け、引き取りに来なかったという。

①健康問題：なし

②性格：

少し人みしりして、人に心を閉ざす。他人に警戒心がある。時々盗みを起こす。対人関係がわるく、他人と目もあわせない。しかし少しずつ変わってきて、現在は穏やかないい子である。

③学校状況：

成績は中の下。得意なのは英語と社会で、苦手は数学。勉強はふつうに好き。学校はやや好きで、友だち関係もわりといい。

④経過：

養育中、中3で警察沙汰（スーパーでの自転車盗）を起こし、1時保護所に1年いて15歳で知的障害者の施設に移された。5月から7月まで週2日の通信制の高校に通学したが、施設でもうまくいかず、施設長がお宅に戻せないかと聞いてきた。障害者手帳も交付された。本人は施設から、外泊で里家に来るようになって、里家に戻りたいと言い出した。高校へ通ことを条件にして、平成22年11月に、再度引き取った。昨年（平成24年）11月迄は里子だったが、措置解除し、それ以後はボランティアとして養育している。高校は6校受験。出身中学の先生が面倒を見てくれて、私立定時制の通信高校に入学し、まじめにキチンと通学できている。今では里子のエリートと言われている。この3月に無事卒業を迎える。

⑤親子関係：

とても気があっている。きちんと叱ったし、2歳半から育てたので、実子と変わりな愛情をもてたと思う。養育返上は、途中で1.2度思ったことがある。

⑥相談相手：

隣近所、担任にも相談した。自分の友だちや里親会の仲間は私の話を聞いてくれて、心は少し軽くなったが、問題の解決にはならなかった。児相に相談したが、何も結果が得られず、児相は役に立つ機関ではなかった。カウンセリングに親も子も長期に通った。

⑦養育返上：

思春期にいろいろ問題行動が出てきたので、１か月位家から離してほしいと児相に言ったら、委託解除され、1時保護所から知的障害者施設に移された。

（5）その他；

＜行政の対応について＞

1.これまでに長期の里子を１０人、乳児院がない時代もあったので、短期の里子を25人養育した。（乳児院のない時代には）緊急避難で全身の傷をチェックしたこともある。行政は公の場では、「里親委託が子どもにとっていい」と言うが、彼らは仕事上、乳児院や児童養護施設を成り立たせて行かなければならないと思っていて、言うこととすることにギャップがある。

2.乳児院に保護されると、医師が健康診断で医学的検査をするが、里親委託の場合はそれがないのはどうしたわけか。

3.里親支援の担当者は、勉強をせず、経験もない人の場合もある。行政は予算がつくので担当部所を作るが、内容が伴わない。乳児院は、この市には現在社会福祉法人の経営する施設が2つある。里親会の法人化の動きもあるが、寄付や市からの援助等を必要とするので、法人化には難しい問題もある。里子は乳児院に数か月置かれて、日が経ってから里親に来る場合もある。

4.児相では何回か知能テストなどされても、結果を知らされないなど、里親との協力の姿勢ができていない。また里子との間で問題が起きると、何年も一緒に暮らしている里親の話を聞かずに、ワーカーのやり方を押しつけてくる。それが本当に里子のためなのかと、疑問に感じる。里親支援に弁護士等の専門家を入れて、児相と里親会が対等の力を持つ支援機関にしてほしいと思います。　　（以上）

309　子ども時代にヨーロッパにいて、養子が日常的な文化の中にいた里母
―将来は「家族」として何らかのかかわりを持たせたいと父親と交流させている

（1）概要：

子ども時代に東欧で暮らした経験を持つ里母は、実子に恵まれなかった時に、不妊治療に時間を取られるよりもと、ためらわずに里子の養育を選択した。フランス社会の中で、里子（養子）養育をする家庭を数多く見てきたことによるものだった。

ポイント：当初、乳児院という集団養育（multiple-mothering）のもたらした行動と思われる不思議な行動をとった子だった。将来実父と一緒に暮らす（家族再統合）を念頭において、いい交流を続けている。

（2）家族構成：

4人家族。里母40代（専業主婦）、里父40代（勤務者）、11歳男子（小5、特別養子縁組済み）、6歳男子（里子）。

今迄に、長期1人、短期7.8人の里子を養育した。（エリアに乳児院が設置されていなかったため。現在は乳児院が2院ある）

（3）里親になった動機：

29才になって、子どもに恵まれなかったので、不妊治療に時間を取られるより、里子を育てる方法を選択した。里母は子ども時代、父の勤務する東欧に3年間住んでいて、休みの時にはフランス、イギリスなどいくつもの国に旅行した。そうした国々には、里子（養子）をするのが一種の文化としてあった。白人の家族に肌の色の違う子どもがいるのも普通のことだったので、里子を育てることに違和感はなかった。里父が学生時代に、児相でアルバイトしていたこともあり、里子養育が身近だったのかもしれない。また、大学の英文科の教師がアメリカ人を妻にし、養子を取った話を聞いたこともあり、里子養育をする人々が身近にいたからかもしらない。とりわけフランスは当時、ベトナム戦争時代があったことに対するベトナム支援の一環として、国際養子縁組をすすめていて、白人の親とベトナムの子という組み合わせがとても多かった。

（4）養育の経過：

1番目の里子（A2）は、生後1週間で委託され、半年で特別養子縁組をした。3歳の時に絵本を使って、実母がいることを告知した。

2番目のAちゃんは、生後4か月で乳児院に預けられた子。現在6歳だが、2歳の時乳児院から引き取り、現在まで4年間養育している。兄（A2）に弟がいたほうがいいと考えて、Aちゃんを養育することにした。

（5）Aちゃんについて：

①お互いに大変だった：

試し行動や反抗、のようなものが 2 年間続いて大変だったが、こちらが絶対折れなかったので、子どもも大変だったと思う。乳児院からは『よくできた子です』と言われたが、同じ年より半年くらい遅い発育だったが、きたえ続けたところ、今ではむしろ人を助ける位のレベルになった。

②性格：

少し強情で、人見知りをし、嘘をつく。約束を破る。身の回りの始末が雑で、あわてん坊。今は人の世話をしたりすることができるようになった。家の手伝いもよくしてくれる。

③親子関係：

Ａちゃんが何を思っているかは、よくわかる。遠慮せずに叱っている。

相談相手：

親、自分の友だち、里親会の仲間

④不思議な行動：

1.当初Ａには奇妙な行動があり、手を焼いた。生後 4 か月で実親から離れたので、虐待というより、乳児院という集団養育のもたらした行動ではなかろうか。

例①自転車の後ろカゴに乗せると大声で泣く。

②自分が選んでもいいことが、わからない（例えば大皿に一緒盛りの料理を家族で取りわけることが分からず、全部自分の分だと思ってしまう）

③公園（目的地）に歩いて行くことを知らず、バギーに乗せられて行くものと思っている。公園に着けば自分から遊ぶが。

④叱られて「おもちゃを片づけないと捨てちゃうよ」と言われてもピンとこない。集団養育で、自分の私物がない状態だったからだろう。おもちゃを捨てられても困らないかのようである。

⑤「ご飯を食べないなら、おやつは無し！」と里母が怒っても、その意味が分からない。乳児院では、個人の行為が後につながることはなく、時間がくればご飯は一斉に出て来る方式だからだろう。

これらは、半年から年位で消失した。

2.施設側（保育者）と里母との微妙な関係

交流期間は 3 か月だったが、Ａは里母の訪問を「自分の安全を取り上げる人」と受け止めるかのようだった。Ａちゃんに接近しようとすると、他の子どもは里母のそばに寄ってくるのに、Ａちゃんは泣く。また保育士側も、（自分に懐いていた子どもを）若くて養育経験もないような里母が奪っていくかのような感情にとらわれたのかもしれない。子どもをとられてしまう、悪く言えば、里母が人さらいのような。

家に連れてくると、キッチンの隅っこ（1 平米位）から動かない。働きかけても無反応。ホームとアウェイの区別の混乱かもしれない。里母は、子どもが懐かなければ、里母側から申し出てキャンセルも出来るし、と楽観していた。1 カ月もすると、家が自分のホームと認識するようになり、自由に動き回っていた。

3.援助者としての兄の役割とママ友たち

Ａちゃんの適応に大きなサポートをしてくれたのは兄（A2）の存在だった。Ａちゃんは兄（A2）を大好きである。里母も兄弟（ＡとA2）の関係を優先するようにした。Ａちゃんの不適応については、児相に相談するよりも、周囲の人（里親仲間、近所のママ友、自分の親）に相談したり、手助けをしてもらった。とくに近所のママ友には助けられた、兄（A2）の養育をしながら作り上げた人間関係のおかげだと思う。30 代で子育てができたことは、同世代の母親たちの子育ての支え合いの中で生きてこられる子、というメリットを生み出し、とても楽しく子育てができた。その時に得た人間関係は、Ａの養育にも援助をもらえて、ママ友と兄（A2）に感謝している。

4.実父との交流

実父との交流はあり、年に 5.6 回は会っている。「眼鏡のパパ」とＡちゃんは呼んでいる。実父は控え目に自分のポジションをとっている人で、幼稚園行事を告げると、大抵見に来てくれる。しかし、家族でお弁当を広げていても、決してその中には加わらず、遠くからＡを見守ってくれているかのような距離を取ってくれるような配慮の人である。妻（Ａの実母）は離婚している。実父は，Ａちゃんを育てられずに乳児院に入れたという。

里親として将来は、父親と何らかの形で、「家族」としてのかかわりを持ち続けていってほしいと願っている。（以上）

4)「きずな」を結びあう（2 事例）

里子養育の際に起きる最大の「困難」は、里子にとっては里母に対する愛着形成が難しいこと、里母にとっても里子とのボンディングができるかどうか過程にある。

そのためには、里子を乳児院や児童養護施設に置かず、最短距離で里親に委託することを望む声が専門家の間にも里親の間からも起きているが、諸事情から、中々条件をクリアすることが難しい現状がある。

事例 102 は、高校生の実母が生後 3 週間の乳児を里親に委託した事例で、里母はそれまで 3 人の里子を養育していたが、「早期委託された子どもは、他の子どもとは気持ちが違う。子どもも里母に寄り添ってくれる」と述べている。早期委託が望ましいとする主張に対するエビデンスの一例であろう。

事例 205 は、少しおもむきの違う事例である。里子を受け入れることは、自分の家庭に異文化をもつ子どもを受け入れる出来事であるが、それが里親にとっての未知との遭遇の過程であるだけでなく、里子にとっても危機的とも言える課題を与えられる状況である。

その点について、フランスの里親ジャン・カートリーは、里親養育に起こることについて、次のように記している。

「里親委託は、家庭の私生活に子どもをうけいれるということで、子どもを危機にさらすことである。なぜならそれは、家族の雰囲気、型にはまった行動、習慣、価値観、そのほかその家庭にある全てのものを、子どもに押しつけることで、たとえそれが家族にとって提供できる寛大な贈り物であっても、子どもにとっては全く新しい体

験であり、それまでの生活や別れてきたものと正反対なのかもしれない」「子どもは、その生き方、行動の仕方、表現などを通して、混乱した親との関係で身につけたあらゆる問題と元の家族関係を、里親家庭へ持ち込んでくる。そのため、その子どもと共に生活することは、家族一人ひとりがアイデンティティの違いと、他人であることをさらけ出して、昼夜を問わず、週日、または年間を通して衝突することなのである」（菊池緑「フランスの里親家庭養育への支援：里親に対する支援」（世界の児童と母性 VOL.74/2013/4）

いわゆる「赤ちゃん返り」「試し行動」は、そうした状況に置かれた里子の適応過程の難しさを表現する用語であるが、事例 205 は、0 歳の里子が、「おばちゃんの子に生まれて、やり直しをしていい？」といって、退行をした希有な例である。この子はおっぱいを吸ったりのような退行だけではなく、物置に籠るなどの、いわば「胎内復帰」とも見ることのできる行動をみせている。この子にとってだけでなく、新しい環境に適応するための心的過程は、どの里子にとっても必死のものであることに、思いをやりたい。

102　生後 3 週間で委託された子との心の通い合いは特別
－早期委託を望む里親たちの声に応えるエビデンスの一例

（1）概要：

実子がいなくて、４人の里子を養育。１番目と４番目はすでに養子縁組。長男は不登校で大検を受け、短大を経て４大に。能力は高いが性格の激しい子。４番目は乳児（3 週間）の時から委託され、自然な愛着形成ができた。２０歳になれば、残る２人も養子縁組ができるので、本人たちが望むなら養子縁組をしたいと考えている。これまで長期委託を 4 人、短期委託を 5 人引き受けている。

ポイント：乳児期早期（生後３週間）の里子の委託が、里母との自然な「きずな形成」を生み出す１例。

（2）家族構成：

里母は専業主婦。夫は勤務者。実子はなく、4 人の里子を長期委託。養子縁組した長男（２２歳）は、遠方の大学（3 年生）に行っている。末っ子（中 3 女子）とも養子縁組済み。現在（長男を除く）5 人家族。夫婦（里母５０代、里父６０代）と 21 歳女子、20 歳女子の姉妹、14 歳女子。

（3）Ａちゃんについて：

Ａちゃん（現在大学生）は親が育てられなくて委託される。虐待をされた子かどうかは不明。5 歳で養子縁組をしたが、思春期になって、「養子になることを自分に相談しなかったのか」と問われた。早すぎた養子縁組だった。小さい時はアトピーがひどかった。我が強く、店でほしいものがあると、ひっくり返って泣きわめくこともあった。

①性格：

＜とても＞素直でない、感情の起伏が激しい、人に心を閉ざす、劣等感が強い、他人に警戒心が強い、＜わりと＞わがまま、甘えたがる、性格が暗い、小心、すぐ暴力を振るう、反省心がない、時々パニックを起こす

考え方や気持のありようが極端で、「まあいいか」の中間の部分が少なく、不利なことを言われたり、考えを否定されると、その時の気分で極端に怒り出したり暴力を振るったりなどするので、気を遣った。

②学校と成績：

成績は中、数学と理科が得意、苦手は英語。勉強はあまり好きではない。学校はやや嫌い。友だち関係はあまりよくない。

中学も不登校傾向で、それでもどうにか継続して登校したが、高１の１学期終わりに、ついに不登校で退学。夢中になるタイプで、５年間、夜中までゲームにのめり込んでいた。

その間、４年半通信制の高校に在籍したが、ここも中退。その頃は不登校の子を集めているサークルに入っていた。給食もあり、居心地良く遊ばせてもらっていた。

19 歳位になって、里父が「このままでは高卒にならないので、就職は中卒でしなければならない、辛いぞ」と言って聞かせた。本人も薄々感じていたのだろう。大検を受験すると言い出し、１２月末に志願して、２月に合格。もともと頭のいい子だった。しかし、「同じ年齢位の子と一緒にいると辛い。自分は親に捨てられて一人ぼっち、自分が笑われているような感じがするから」（疎外感）と言っていたので、４年制大学ではもたないだろうと、短大を受験し合格。農芸、経営、商業のコースがあったが、経営を選んで合格した。短大を卒業後、4年制大学の３年に編入した。夏休みには（帰ってこなくてもいいと里親は思っていたが）帰省している。一人になって離れて暮らして、成長したのか、妹たちは「兄は変ったね」と言っている。

卒業したら、１人暮らしをしなさいと言ってある。

③実親との面会：

15 歳頃に「実母に会いたい」と言い出したことがあり、里父と２人で会いに行ったが、会えなかった。その頃は、「親への恨みを晴らしたい」と言っていた。

（4）21 歳の里子（知的障害児）について

５歳になる直前に３歳の妹と一緒に委託された。知的障害児で、小学校は普通クラスだったが、中学は支援学級。高校は寄宿舎のある高等養護学校へ。担任がよく面倒を見てくれ、現在は農協のバックヤードで、野菜などの仕分けをして働いている。一緒に働いてるオバサンたちがよくしてくれる。

（5）20 歳の里子（妹）

姉とは姓が違う。札幌の専門学校で製菓コースに入っていて、パテシエになりたいと言って頑張っている。授業料などお金はかかるが、自分の小遣いや身の回りの物はアルバイトで賄っている。

（6）４人目の里子